

BTC NEWS

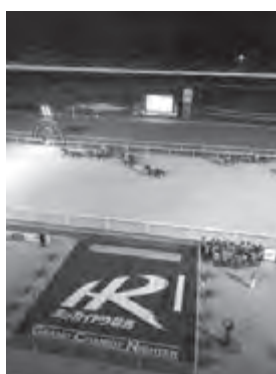
BTCニュース

2024年(1) No.134

ホッカイドウ競馬 重賞競走「BTC賞第1回 ネクストスター門別(H1)」に協賛



優勝馬トラジロウ号 写真提供：田中哲実氏



CONTENTS

- | | |
|--|---|
| ① た・づ・な 1
競馬産業におけるJRA馬事部の取組み | ⑤ BTCからのお知らせ 10
BTC調教場の冬期馬場管理について |
| ② やさしい育成技術 3
JRAのリトレーニングプログラムとその応用① | ⑥ 海外の馬最新情報 12
馬鼻肺炎の神経型について～馬ヘルペスウイルス脊髄脳症 |
| ③ 研修生のページ① 6
～第41期生のここまでの研修を振り返って～ | ⑦ 科学の箱馬車 16
炎症マーカーで馬体内の炎症を捉える！ ーウマ血清
アミロイドA(SAA)簡易測定キットの臨床応用ー |
| ④ 研修生のページ② 9
河嶋調教師(BTC第21期修了生)から
現役研修生への講話レポート | あとがき 20 |



競馬産業における JRA馬事部の取組み

日本中央競馬会 馬事部長
松田 芳和



はじめに

新年、明けましておめでとうございます。

JRAの松田と申します。昨年9月に馬事部長に就任しました。よろしくお願い申し上げます。

さて、JRA馬事部ではその名の通り、育成馬、現役競走馬、引退馬、乗馬など馬にかかわる業務に取り組んでおり、その内容は、生産育成、競走馬のアンチドーピング、防疫、馬事振興など多岐にわたっております。今回は、その中でも特に重要な課題である「競馬産業における人材不足への取組み」と「引退競走馬に関する諸課題への取組み」に関してご紹介したいと思います。

競馬産業における人材不足への取組み

日高地区をはじめとした生産地においては、20年ほど前から「後継者不足」が叫ばれており、未だ解決に至っておりません。現在ではさらに深刻な「若年層の就労者不足」が生産牧場のみならず育成牧場も含めた共通の喫緊の課題となっています。生産・育成牧場で就労する若者の減少がこのまま継続すれば、競馬産業の発展はもとより、これまでに築き上げてきた「馬を取扱う技術」、「生産・調教技術」などを次世代に継承させていくことが困難となり、先人が試行錯誤した努力が水泡に帰すことになりかねません。JRAとしても、人材不足の問題は早急に取り掛からなければならない重要な課題と考えております。

競馬産業における「人材不足」をあらわす顕著な現象として、近年、生産地においてインドやフィリピンなど主にアジア諸国からの外国人騎乗技術者が増加している点があげられます。軽種馬育成調教センター（BTC）を利用している方々はご存じだと思いますが、当施設を利

用する外国人騎乗者数は2000年代には全体の20%程度で推移していましたが、2010年代中盤から急激に増加し、2023年には半数を超えています（58%）。特にインド人は190名以上で、外国人騎乗者の約76%を占めています（BTC全体では約44%）。

一方、地方競馬の認定厩務員に目を移すと、南関東4競馬組合を除くすべての競馬組合において外国人が就労しており、特にホッカイドウ競馬では約3割が外国人となっています。札幌競馬場で開催される交流競走にはホッカイドウ競馬所属馬が多数出走しており、数年前より外国人（主にインド人）の認定厩務員が臨場し、中央競馬の開催においても外国人厩務員の臨場が現実となったところです。

それでは、人材の確保とその養成に関して、これまで行われてきた活動について紹介いたします。牧場における優秀な人材確保の一助として「牧場就業促進事業“BOKUJOB”」の活動が挙げられます。牧場関係者の要望を受けて2011年に発足したものであり、競走馬育成協会、日本軽種馬協会（JBBA）、日本競走馬協会、BTCおよびJRAの5団体で事務局を構成し、各牧場の協力を得ながら就業促進を図ることを目的に主に4つの活動を行っています。それは、①専用ホームページによる求人牧場情報の提供、②競馬場における大規模な就職フェアの開催、③日高地区やトレセン周辺牧場への体験ツアーの実施、④競馬場やイベント会場（高校総体馬術競技、日本学校農業クラブ全国大会等）におけるサポートデスク（広報・相談ブース）の出展、となっております。また、近年、Webを活用した就労希望者と牧場等の相談が浸透してきたことに伴い、オンライン会議ソフトを活用したWebフェアの開催も行っています。この活動については、ホームページのみならずTwitterやInstagram等の若年層に馴染みやすいSNSを活用した

告知も行っています。牧場への調査結果によれば、BOKUJOBを経由して就労した者の数は、2011年から2022年の12年間で延べ394名に上りますが、残念ながら求人数には及んでおりません。

一方、人材養成事業としては、BTCにおける育成調教技術者養成研修、JBBAにおける生産育成技術者研修が実施されています。いずれも研修期間は1年間であり、研修内容は馬取扱実技、馬学講義および騎乗実技が中心であり、各団体の特性上BTCの研修は騎乗実技、JBBAの研修は馬取扱実技に重点を置いて行われています。これらの研修の受入れに関してBTCは2019年、JBBAは2018年まで応募人数が減少していましたが、BOKUJOBを活用し応募者の確保に取り組んだことにより近年は増加傾向にあります。特に2019年から次年度の募集に向けて、BTC・JBBA合同の体験入学会を開催するとともに、ホームページやSNSにおける両事業の紹介記事の充実を図った効果が大きかったようです。

引退競走馬に関する諸課題への取組み

競走馬に限らず動物への福祉や愛護は、国内外における重要なテーマの一つであり、動物が介在する経済的・社会的活動に対し、世間から厳し目で見られています。競馬も例外ではなく、現役時代はもちろんのこと、引退後の競走馬に対しても、セカンドキャリアに進み幸せな余生を過ごせるよう競馬サークル全体で責任をもって取り組む必要があります。

近年、国際的な引退競走馬に関する話し合いの場として、「引退競走馬に関する国際フォーラム」(IFAR = The International Forum for the Aftercare of Racehorses)」が2017年に設立され、欧米を中心に引退競走馬や競馬関係者が参加して様々な問題に関して議論されています。JRAも第1回から参加するとともに、このフォーラムのスポンサーとなって活動に協力しております。

日本国内では2017年12月に監督官庁である農林水産省、馬主、調教師、騎手、生産者、地方競馬および中央競馬の各代表者からなる「引退競走馬に関する検討

委員会」が立ち上げられ、引退競走馬に関する諸課題について検討が開始されました。その基本スタンスは、サークル全体で問題意識を共有し、その状況の改善等に向けた継続的・安定的な取組みを目指し、協力していくというものです。この検討委員会では「引退競走馬のセカンドキャリア促進」(乗用馬等への転用促進)と「高齢・引退馬対策」(養老・余生問題)が二本柱として進められてきました。

「引退競走馬のセカンドキャリア促進」に関する具体的な取組みは、競走馬から乗用馬へのリトレーニング技術の向上、引退競走馬による馬術競技会の開催支援、優秀サラブレッド競技馬の表彰などが挙げられます。また、東京2020大会を契機とする馬術競技の振興、大学馬術部への活動支援、馬とのふれあい機会を増やす試み、障がい者乗馬やホースセラピー活動への支援など、馬の多様な利活用を促進する施策にも取り組んでいます。

さらに、「高齢・引退馬対策」として、引退競走馬の養老・余生に取り組んでいる諸団体に対し、活動内容等を精査したうえで支援を実施しております。これまでの「引退競走馬の養老・余生等を支援する事業」に関する情報は、JRAホームページ(<https://jra.jp/news/202302/020103.html>)に掲載していますのでご覧いただければ幸いです。

最後に

人材不足の問題は、生産地に限らず全国の育成牧場においても同様であり、牧場従業員のみなならず獣医師や装蹄師の不足も懸念されております。今後、国内の人口減少・高齢化が顕著に進むなか、馬産業全体で益々人材不足の深刻化が予測されることから、JRAでは総合企画部が中心となり、競走部や馬事部など関連部署によるプロジェクトチームが昨秋に設置され、問題解決へ向けた対応が開始されております。

一方、引退競走馬の諸課題に関しては、新たな専門的団体を今春に立ち上げる予定です。この新団体においてこれまでの取組みを継続するとともに、宇都宮事業所では乗用馬に転用する際の一時繋養などの事業も展開する予定です。

JRAのリトレーニングプログラムとその応用①

日本中央競馬会 馬事公苑 宇都宮事業所 調査役

宮田 健二

はじめに

引退競走馬を乗馬へ再調教（リトレーニング）する取り組みは、以前から広く行われてきました。調教方法について、馬術家向けの教科書だけでなく初心者向けの書籍も多く見られます。しかし、馬との接し方や、馬の取り扱いに関する情報は多くはありません。

JRAでは、人馬が理解しやすいリトレーニング手法の普及を目的として、“引退競走馬のリトレーニング指針（サラブレッドの理解とグラウンドワーク）”と題した冊子を作成しました。この冊子に記載した、馬を扱うために必要な知識や、JRAのリトレーニングプログラムについて、これから4回にわたって紹介させていただきます。



引退競走馬のリトレーニング指針(写真1)

人馬の信頼関係を構築するために必要な知識や、馬への効果的な働きかけ方、馬のリアクションを評価するための判断基準などをまとめ、2020年に作成しました。経験の浅い人でも理解・実践できる内容となっております。

馬を正しく扱うために必要な基礎知識

1. 馬とのコミュニケーション

言語を持たない馬にとって、しぐさや距離感は重要なメッ

セージです。接する人の何気ない行動でも、馬は重要なメッセージと解釈します。そのため、我々は馬に接するすべての時間を調教（もしくは馬との会話）として捉え、その対応に注意しなければなりません。正しく馬に接するためには、馬の習性やボディーランゲージを理解する必要があります。

元来、馬は群れを形成して生活する草食動物です。群れを維持するためにはコミュニケーションが必要です。群れにおける馬の行動を学べば、ボディーランゲージの意味を理解しやすいと思います。



代表的なボディーランゲージを紹介します。上図左のイラストは片側の耳を関心のある方向に向けるしぐさです。馬の視力は、人と比べても弱いようです。しかし、聴力は人よりはるかに優れています。優れた耳で情報を得ようとするのは、注意を向けている証拠だと言えます。上図右のイラストは、チューイング（咀嚼：そしゃく）とリッキング（舌を出す）のしぐさです。馬は、緊張していると口を堅く閉じます。緊張から解放され、少し落ち着いたときにチューイングやリッキングが見られます。

心と体の関係は不思議で、緊張から解放されると勝手に体が動いてしまう一方で、意識的に体を動かすと、心の緊張までほぐせます。試合前のアスリートがしきりに体を揺らしたり、声を出したりする光景を見かけますが、緊張してこわばった体と心をほぐしているものと思われます。馬も同様で、なかなかリラックスしてくれない馬の顎や耳の周囲をマッサージしてあげたり、口元を刺激して顎を動かすと少しだけ緊張がほぐれるようです。

2. パーソナルスペース

パーソナルスペースとは、心理的な縄張り空間です。他者が侵入すると不快と感じる空間で、大きさは心理状況や接している相手によって変化します。群れにおいて、馬は個々のパーソナルスペースを主張します。馬ごとの上下関係も存在します。上位の馬がスペースに侵入した場合、下位の馬は譲らざるを得ません。



馬は円形のパーソナルスペースを主張する

★パーソナルスペースのイメージ

上下関係は、常に変化します。そのため、馬は必ず相手との距離を確認します。馬が近づいて来た時、そのプレッシャーに負けてスペースを譲ってしまうと、馬は自分が上位だと認識します。個体間の距離は重要な意味があるのです。経験豊富な技術者が馬に接する様子を観察すると、技術者は適度な距離感で馬に接します。技術者が経験と勘で自然と身に着けたスキルだと思いますが、そのような接し方をすると馬は落ち着いてリラックスします。初心者が馬のリアクション等に過剰に反応し、離れすぎたり、馬に近づかれ過ぎたまま放置してしまうと、馬は落ち着きをなくしたり不機嫌になります。

3. 『安心できる環境』

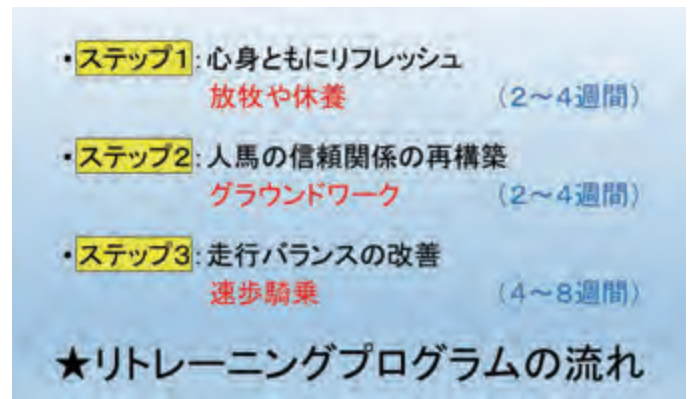
群れは、『安心できる環境』を求めてリーダーの指示に従って行動します。群れのリーダーは、常に肉体的に優れた個体とは限りません。野生馬の群れでは、賢く経験豊富な牝がリーダーであることも珍しくありません。我々が、『安心できる環境』を提供するリーダーのような存在になれば、馬と良好な関係を構築できると思います。

JRAのリトレーニングプログラム

このプログラムは、馬が新たな教育を受け入れる準備に重点を置いた3つのステップで構成されています。

ステップ1

最初に取り組むのは、馬のリフレッシュとケアです。引退



したばかりの競走馬の多くは、心身ともに消耗しています。疲れきってはいは新たな教育など受け入れられません。リフレッシュには2週間程度の時間をあてていますが、馬の状態を見て調整します。

ステップ2

馬がリフレッシュできたら、グラウンドワークという手法を用いて人馬の関係性を再構築します。グラウンドワークとは、馬に乗らずに地上から働きかける調教法で、馬の本能や習性を利用します。グラウンドワークには特別な道具はほとんど必要なく、簡単な基礎知識を理解すれば乗馬初心者でも習得は難しくありません。

ステップ3

ステップ3の目的は、走行バランスの改善と基礎体力作りです。競走馬は、より速く走るためF1マシンのように低重心です。一方、乗馬は前後左右、時には上方に方向転換するため、重心は高くやや後ろ寄りとなります。ライダーのフォームや重量も違います。この違いに馬が戸惑わないようにするため、ライダーは軽いタッチで手綱を保持し馬の背中に負担をかけないように、馬のバランスに合致した前傾フォームで騎乗し、脚扶助による前進氣勢を維持しながら速歩運動を行います。このような速歩運動を継続しながら、徐々に馬術的なバランスやリズムを教えていきます。同時に、リフレッシュやグラウンドワークの期間で少し衰えた基礎体力を回復させます。

グラウンドワークでは、6つの作業を実施します。グラウンドワークにおける馬への働きかけには、プレッシャー（馬の好まない刺激）のonとoffを用います。馬が動きたい時に動きを止め、止まりたい時に動かすなど、リーダーである人の指示と目的を分かり易く馬に伝え、求めるリアクションが得られた場合にプレッシャーをoff（解除）にします。今回は

Level 1の引き馬と、馬とコミュニケーションを取るうえで重要な愛撫について記載します。

- Level 1 引き馬
 - Level 2 横からの働きかけ
 - Level 3 前後への働きかけ
 - 項(うなじ)への働きかけ
 - 鈍化
 - Join-Up
- ★グラウンドワーク

Level 1 引き馬

引き馬の際、一般的に人(ハンドラー)は馬の左肩の位置に立ちます。この人馬の位置関係を馬に意識させ、馬をハンドラーに集中させることが目的です。作業は単純で、馬を十分に推進した状態で停止と発進を繰り返します。停止の際、馬に何の合図もせずハンドラーだけ停止します。多くの馬は本来の人馬の位置関係よりも前方にはみ出すでしょう。



すかさずリードで馬を抑え、馬の顔周辺にプレッシャー(リードの余りを振り回す)を与えます。



馬が後退して本来の位置関係に戻ったらプレッシャーを

解除し、愛撫します。愛撫することで、馬には考える時間的余裕が生まれます。本来の位置関係からはみ出すことは間違い(求められないリアクション)であり、ハンドラーの動きに同調して人の右側の位置(引き馬の正しい位置関係)にいれば余計なプレッシャーを受けることなく安心できることも覚えます。停止と発進を繰り返すうちに、馬は徐々に集中し始めます。馬を扱う人にとって引き馬は日常的な作業であり、ついつい手を抜きがちです。しかし、引き馬は馬との関係性を改善するうえでとても大切な作業です。人馬の位置関係を常に意識するだけで、馬の行動は大きく変わると思います。

愛撫について

最後に、“愛撫”について考えてみたいと思います。私は大学時代馬術部に所属していました。先輩から首の付け根を軽く叩いたり優しく撫でることを愛撫と呼び、馬を褒めるときには愛撫するように教わりました。しかし、撫でられて喜ぶ馬はいますが、首を叩いて喜ぶ馬を見たことがありません。それでも、騎乗中にこまめに愛撫(軽く叩く)した方が馬はよく働いてくれるように思います。また、馬を上手に扱う人に限ってこまめに愛撫し、馬を褒めるように見えます。愛撫にはどんな意味があるのでしょうか。

あくまでも私の個人的な意見ですが、プレッシャーを解除した後に愛撫することで生まれる“間”(ま:時間的余裕)は、馬にとって重要な意味を持つのかかもしれません。この“間”を利用して、馬は人の働きかけに対する自分のリアクションが間違っていないか考えます。初心者には、騎乗中に落ち着いて馬を観察する余裕などありません(少なくとも乗馬を始めたばかりの私にはありませんでした)。馬に自分の考えを伝えようとして、馬のリアクションを待たずに矢継ぎ早に働きかけを行うと、馬は混乱したり不機嫌になります。馬と過ごす時間の中に首を軽く叩くという具体的な動作を取り入れることで、初心者が落ち着いて深く考えられない状況でも馬に“間”を与える癖をつけるのが“愛撫”だったのではないのでしょうか。

プレッシャーを解除し、愛撫する間にチューイングやリッキングのしぐさがよく見られます。愛撫の際は少しだけ口元に注意してみてください。馬の変化が分かりやすくなると同時に、馬が可愛く見えると思います。たくさん愛撫して、たくさん褒めて、馬も人もハッピーになれると良いですね。(次号へ)

赤塚 紗也加

BTC研修での生活が約半年を過ぎようとしています。思い返せば、日々の厩舎作業や騎乗訓練、課外研修や中間試験等を経て、この上半期はあっという間でした。私の今までの人生で、こんなに頑張ったことはないという毎日をごしています。

特に騎乗訓練では沢山の課題にぶつかり、調子の良い日もあれば不完全燃焼で終わってしまう日もあります。自信や体力が足りず、時に強く厳しい指導を頂くこともあり、正直何度もくじけて逃げ出したくなることもありました。でもそれ以上に、大好きな仲間との絆やここでしか得られない経験の大きさを実感し、「負けるものか」と自分を奮い立たせて毎日一生懸命に楽しんでいます。さらに、日々の厩舎作業も大切にしています。なぜなら、私を成長させてくれる馬たちに感謝と愛情を込めて手入れをし、厩舎作業をすることも馬の世界では重要な仕事だと思っているからです。教官方から地上での動きは馬上にも通ずると指摘があり、自らの騎乗を良くする為にも妥協せず行っています。

また、私はオフの時間も大切にしています。談笑しながらお菓子を食べたり、自室で趣味に没頭したりと、とても充実した寮生活を送っており、このリフレッシュがあってこそ、研修を頑張れていると思っています。更にこの自由時間の中で、自分を高めるためのトレーニングを行っています。訓練で見つけた改善点をシミュレーターで確認したり、自分に足りない筋力をつけたりと励んでいるところです。

残りの研修では、JRA日高育成牧場での実習などを通じてもっと自分に力をつけていくチャンスです。今後も立派なホースマンを目指して頑張ります。



広大な BTC 調教場の騎乗訓練で緊張の面持ち

奥田 健人

朝の空気に爽秋の気配が感じられる頃となりましたが、まだ厳しい残暑が続く中、研修生一同、騎乗訓練や厩舎作業、学科や課外活動等充実した日々を過ごしています。

約半年が経った今では、走路での単走縦列や併走を行い、時には短い鍔での競走姿勢をとっての騎乗訓練をしています。並行して角馬場での経路走行や障害飛越の訓練により、ハミ受けや正しいコントロール操作を学んでいます。全てが上手くいくわけではなく、想定外の動きをされる事やペースコントロールに苦戦する事もありますが、それらに対応する為に経験を積み、技術を身につけたいと意識を高めて臨んでいます。それでも自分の不注意から軽度の負傷をしてしまい1週間程騎乗出来ない日々も過ごしました。ただ、その間も他の研修生の騎乗を見て、教官の指示を良く聞き、自分ならどうするか考え、結果的にはこの期間で騎乗に対する理解をより深める事が出来たのではないかと思います。

BTCの教育用馬は約50頭いますが、1頭毎に性格や反応が違い、騎乗だけに留まらず日頃の手入れや接し方にも状況に合わせた対応が必要です。それを自分で考え、実行していく事が重要だと認識出来たのも成長だと感じています。

課外研修では、開催中の札幌競馬場の装鞍所や検量室の見学、牧場実習では実際に育成馬の調教も見学させて頂きました。また、JRA調教師による講話など、貴重なお話を聞いた事もとても印象に残っています。

JRA日高育成牧場での馴致実習が始まり、就職に向けての技術を学んでいます。これまで以上に、作業スピードの向上や効率を考えた動きが求められます。修了までの残り半年間ありますが、今まで以上に体調管理を心掛け、常に集中力を高めて研修に取り組んでいきます。



上半期表彰式にて厩舎作業賞受賞の筆者（右から2番目）

富永 大雅

私たち41期生が入講してもうすぐ半年になります。

BTCに来るまで馬にほとんど触れたことがない私でしたが、今では毎日馬に接し、厳しいながらも楽しい日々を送っています。

この研修の好きなところは毎日馬に乗れることです。騎乗訓練では、まだまだ教官に求められているレベルに達するにはほど遠いですが、少しずつ出来ることが増えていくことが面白く、とてもやりがいを感じています。また、同時にたくさんの課題も見つかります。今の自分には、スピードへの恐怖や緊張からくる精神的課題と、バランス良く身体を使うための技術的課題があります。毎日のように課題が見つかりますが、1鞍1鞍を無駄にしないよう、今日は昨日より少しでも良い騎乗にしようと訓練に臨んでいます。まだまだ課題ばかりの私でも、ほんのたまに「今の騎乗は良かったのではないか」と感じる時があり、そういうところがたまに楽しくあります。

また、肉体的にも精神的にもハードな日々の研修を乗り越えられているのは、同期のみんなとの時間があるからです。私たちは4月に初めて出会いましたが、この半年間でとても濃い時間を過ごしてきました。高い志を持つ同期の仲間たちが私の日々のモチベーションになっています。彼らがいるから「負けるものか」と自主トレーニングに励み、オフの時間には共に笑い自分のリフレッシュになっています。寮生活というのは初めての経験でしたが、BTC研修では寮生活が楽しみな面もあったので、日々の研修を楽しくしてくれている同期のみんなには本当に感謝しかありません。

これからJRA日高育成牧場での馴致実習や、就職活動がはじまります。BTC研修修了後に直結してくることばかりです。ホースマンとして責任を持って仕事出来るように、残りの研修期間も集中して臨みます。



通常の騎乗訓練とは違う外乗でリフレッシュ

ホッカイドウ競馬 LIVE「なまちゃき」に出演! 【BTC 賞 第1回ネクストスター門別 (H1)】

公益財団法人 軽種馬育成調教センター 教育課

平野 優



LIVE 出演の様子 (左2番目から大西さん、大畑さん、筆者)

BTCでは、「全日本的なダート競走の体系整備」により新設されたホッカイドウ競馬重賞競走「BTC賞 第1回ネクストスター門別 (H1)」に協賛、10月5日にレースが行われ、合わせて研修生も門別競馬場見学を行いました。レース前には浦河高校放送局制作のBTC紹介動画が放映され、併せてホッカイドウ競馬 LIVE「なまちゃき」に研修生の大西さん、大畑さん、筆者が出演し、動画配信にてBTC研修のPRを行いました。

出演した大西さんは、「研修で大変なことは、騎乗訓練で馬や周囲の状況にも気を配りながら、自分が正しいフォームで騎乗できているか等、常に自分で考えて乗ることです。楽しいことは、馬と触れ合えることや、同期のみんなと過ごす寮生活がとても楽しいです」、また、大畑さんは、「大変なことは、早朝からの作業です。まだ朝早いには慣れません。楽しいのは、騎乗がうまく行ったりしたときで、馬とピッタリ息があった瞬間は、とても気持ちがいいです。また、仲間たちとわいわい過ごすだけで楽しいです」と話してくれました。

研修生は今回の見学を通して、このような競馬の舞台で活躍できる馬づくりが出来るようになりたいと改めて感じたようでした。JRA日高育成牧場での馴致実習にて馬の取扱いの難しさを実感しつつ、試行錯誤しながら研修に励んでいます。



浦河高等学校放送局制作 BTC 紹介動画

河嶋調教師 (BTC第21期修了生) から現役研修生への講話レポート

公益財団法人 軽種馬育成調教センター 教育課長

小守 智志

はじめに

8月29日、2023年JRA調教師免許を取得された河嶋宏樹調教師（BTC21期修了生）から現在の第41期生と関係者向に講話をいただきました。

・河嶋調教師の略歴

2003年4月 BTC第21期生入講

2004年4月 ノースヒルズ就職

2008年1月 JRA競馬学校厩務員課程入学

2008年8月 栗東・中竹和也厩舎（厩務員）

2008年10月 〃 （調教助手）

2023年 調教師免許取得

河嶋調教師は、6回目の挑戦で、BTC修了生として4人目となるJRA調教師免許を取得されました。最終選考の面接については「思い出したくない、思い出せなくなった?」と言うくらい、良い意味で集中していたそうです。研修生時代は、筆者は当時も教官をしていましたが、生活態度は良好で、遅刻は一度も無く、いつも馬の事を第一に考えて騎乗訓練や厩舎作業に取り組んでいたと記憶しています。

1. 研修生時代と牧場時代について

Q：研修中で一番記憶に残っていることは何ですか？

A：BTC調教場内のグラス馬場での騎乗訓練中、隊列から外れてしまい、ハロン12-12の大爆走をしてしまったことです。声を張り上げた教官の指示が、しだいに遠くなったのを今でも覚えています（笑）。

Q：騎乗で100点の騎乗を目指すために、常にどのようなことを心掛けていますか？

A：100点の乗り方より、その乗り方や調教内容が馬に合っていたか？理想に近づけたか？という事が大事だと思います。馬に乗る以外も、普段から異変に気付けるように接することが100点を目指す乗り方に繋がると思います。

Q：就労先として、ノースヒルズを選んだ理由を教えてください

い。

A：BTCの牧場実習でお世話になったのがきっかけです。現役のオープン馬に乗せて頂き、大変でしたが良い経験をさせてもらい、また、スタッフの方々もみんな優しいので決めました。

Q：牧場で働くにあたって必要なことは何ですか？

A：牧場に限りませんが、コミュニケーション能力と笑顔ですね。良い仕事は一人では出来ないもので、チーム一丸となる関係性が大事だと思います。それとやはり笑顔（笑）。



21期生集合写真 河嶋調教師は前列左から3番目

2. 厩務員時代の事と調教師としてのこれからについて

Q：いつ頃から厩務員、そして調教師になる事を考えましたか？

A：小学2年の時にテレビで有馬記念のパドックを見て、「馬ってキレイだな～、カッコイイな～」と思ったのがきっかけで、小学5年生で厩務員になりたいと思いました。中学校の卒業文集には、将来の夢は調教師と書いていました！

Q：どのような厩舎にしたいですか？

A：とにかくスタッフみんなが明るい厩舎です。関係者・ファンの方々に応援してもらえる厩舎作りをしていきたいです。

3. 研修生の感想

●お話の中で、研修生時代は同期の中では平凡で落ちこぼれだったと仰っていましたが、河嶋調教師の言葉から伝わってきた謙虚さと控えめな感じから、とても人柄の良さを感じました。また、調教師になれたことは運や人の縁だと仰っていましたが、河嶋調教師の努力あつての結果だと思うので、開業して頑張りたいです。(I.A)

●今回の講話を聴いて、現在、騎乗訓練で教官に注意されている事や、普段の厩舎作業や馬の取り扱いにおいて、基礎をしっかり身に着けることが大切だと分かりました。(Y.S)

●特に印象に残ったことは、「調教において、自分にとって100点であっても、馬にとっては100点とは限らない」という言葉です。「上手く乗った」と思っても、それが馬の調教として正しかったのか?しっかりと馬のコンディションに合わせた調教であったのか?を考えることが大事と知りました。人間関係も馬との関係も、明るく積極性を持って接していくことが大事だと教えて頂いたので、今後に活かしたいと思います。(O.K)

おわりに

今回、河嶋調教師の講話では「明るく」「楽しく」「人と

の縁」という言葉が多く聞かれました。「こんな私でも調教師になれたのだから……」と謙遜してお話し頂きましたが、河嶋調教師の人柄と努力の賜物だという事は、研修生全員が気付いたようです。

今後の河嶋調教師の活躍を期待すると共に、馬業界にいる全てのBTC修了生たちの活躍も、心から応援していきたいと思います。



河嶋調教師と第41期生との集合写真

5 BTC からのお知らせ

BTC調教場の冬期馬場管理について

公益財団法人 軽種馬育成調教センター 業務課

松村 拓

はじめに

BTC調教場は日高地方東部の浦河町に位置し、冬は比較的積雪も少なく、穏やかな気候が特徴です。しかし積雪が少ない分、地表が寒気にさらされて地下深くまで凍結するため、屋外の馬場については11月下旬から翌3月下旬までの約4ヵ月間閉鎖となります。そのため冬期は3ヵ所の屋内馬場での調教が中心となりますが、BTCでは年間を通して安全にご利用いただけるよう、馬場状態の維持・管理に努めております。

今号では、冬期間に供用される馬場の維持管理について紹介します(図1)。いずれも屋内馬場のため積雪の影響はほとんど受けませんが、気温の低下によって馬場が凍結しないよう、凍結防止剤散布作業を行っています。

ウッドチップコースの凍結防止作業

まずウッドチップコースの屋内直線馬場・屋内坂路馬場

の整備についてご紹介します。

BTCでは、外気温が0℃以下となりウッドチップ層の地温も5℃を下回る11月下旬頃から凍結防止剤の散布を実施しています。フレーク状の塩化マグネシウムをブロードキャスターで散布し(写真1)、散水車で霧状に散水を行い、パワーハローで上層の15cmを混合します(写真2)。最後にミキシングハローで転圧・ハロー掛けを行い、仕上げます。

翌日以降は通常どおりミキシングハローによる転圧・ならしを行います。散水は埃止め程度の最小限に抑えます。また、定期的に壁際に寄ったウッドチップを人力等で掻き出し、モーターグレーダーを使い厚さを均一に調整し、安全確保に努めています。特に冬は馬場が限定され利用頭数が増加するため、ウッドチップの細粒化やクッション性の低下が懸念されます。そこで定期的に新材ウッドチップを少量ずつ(12~40㎡)補充し、パワーハローで攪拌するなど、常に安定した馬場状態の維持を心がけて整備を行っています。

塩化マグネシウムの散布後は、2週間毎に同様の整備を行います。例年、塩化マグネシウムは11月に1回、12月に2回、

1月に2回、2月に2回の合計7回散布し、1シーズンの散布量は屋内直線馬場に62t、屋内坂路馬場に38tを基準としています。

	屋内直線馬場	屋内坂路馬場	屋内トラック砂馬場
材質	ウッドチップ (北海道産カラマツ材) 厚さ25cm		クッション砂 (北海道産) 厚さ10cm
全長	1,000m		600m
幅員	7m×2コース	走路7m＋ 帰り馬道3m	7m
総面積	約14,800㎡	約10,100㎡	約5,500㎡

図1 冬期に供用される馬場は3種類あります。



写真1 ブロードキャスターによる散布
最大1t積載が可能で、馬場の水分状態に合わせ、回転数や振れ幅を調整しながら散布します。



写真2 パワーハローによる上層の攪拌
爪で上層の15cmをかき混ぜ、ドラムで均します。

ダートコースの凍結防止作業

次に、屋内で唯一のダートコースである屋内600mトラック砂馬場の整備について紹介します。

屋内600mトラック砂馬場は、内壁側にある高さ4mの開口部から雪や寒気が吹き込んで凍結する場合があるため、速効性に優れた塩化カルシウムを使用しています。しかし砂のクッション性を損なう作用もあるため、定期的な散布は行わず、雪の吹込み状況や気温に応じて適宜散布しています(昨年は月4回・各回250kg程度)(写真3)。

日々の整備では散水は埃止め程度の最小限に抑え、吊り



写真3 冬期間の屋内トラック
雪が吹き込んだ場合、溶けた水が凍結リスクになります。この時は人力で除雪し、塩化カルシウムを300kg散布しました。

上げハローで均しています。また、定期的に壁際に寄ったクッション砂をモーターグレーダー等で掻き出し、砂の深さや水分分布の偏りをなくすため、レベルハローで均一に仕上げています。

この馬場は唯一通年利用されている砂馬場であるため利用頭数が多く、特に砂の劣化が進みやすい馬場でもあります。さらに凍結防止剤によって砂のクッション性も低下するため、BTCでは隔年で砂の総入替を実施しています(2022年実施済・次回は2024年の予定)。

BTC調教場では毎年の気象条件に合わせて臨機応変に凍結防止剤の散布時期・散布量を調整し、できる限り馬場状態を一定に保つよう努めております。また、今後も利用者の皆さまに安心して安全にご利用いただけるよう、塩害等のリスクにも十分注意しつつ、適切な使用・管理を心掛けてまいります。

※参考) 凍結防止剤の特徴

- 1) 塩化カルシウム：屋内600mトラック砂馬場で使用
- 溶解熱が大きく、凍結防止や融冰雪によく効きます。凍結温度は約-55℃です。白色の丸い粒状で、潮解性があるため、保管時は密封するなど注意が必要です。冬場の道路をはじめ、広く利用されている凍結防止剤です。
- 2) 塩化マグネシウム：屋内坂路・屋内直線で使用
- 豆腐作りなどに利用される“にがり”の主成分です。ウッドチップ中や傾斜地でも留まりやすいように、フレーク状のものを採用しています。溶け方が塩化カルシウムより緩やかな分、速効性は劣りますが、水分の再凍結防止に優れるためウッドチップ馬場の埃止めやクッション性の維持に役立ちます。凍結温度は約-33℃です。
- 塩化カルシウムに比べて多少安価ですが、こちらも潮解性があるため、保管時には注意が必要です。

馬鼻肺炎の神経型について～馬ヘルペスウイルス脊髄脳症

日本中央競馬会 馬事部 防疫課

伊藤 瑛基

はじめに

馬鼻肺炎は、馬ヘルペスウイルス1型（EHV-1）あるいは4型（EHV-4）の感染によって引き起こされる疾病の総称で、この2種類のウイルスを合せて馬鼻肺炎ウイルス（ERV）と呼びます。EHV-4感染の場合は一過性の発熱と軽度の呼吸器症状を引き起こすのみですが、EHV-1感染の場合は、呼吸器症状（呼吸器型）、流産あるいは生後直死（流産型）、あるいは後駆麻痺を主徴とする運動失調（神経型）の3種の症状を引き起こし、経済的損失をもたらします。特にEHV-1感染による神経症状は、馬ヘルペスウイルス脊髄脳症（Equine Herpesvirus Myeloencephalopathy：EHM）と呼ばれています。過去の調査では、EHM から分離されたEHV-1株の多くに特異的な遺伝子変異のあったことが報告されています。

近年欧米では、EHM 流行が増加傾向にあり、競馬開催や馬術大会が中止に追い込まれる事例が報告されています。今回はEHV-1感染症、特にEHM を重点的に解説いたします。

感染様式

感染した馬の鼻汁や、感染により流産した胎子や胎盤、羊水への直接的な接触や飛沫の吸引により、鼻腔から感染します。また、ウイルスに汚染されたヒトの手や衣類、馬具などを介した間接的な接触により感染します。初感染馬では1週間にわたり鼻腔からウイルスを排出します。

1度感染した馬は生涯ウイルスを体内に保有し、潜伏状態時は特に症状を示しませんが、輸送やトレーニングといったストレスにより免疫力が下がると再活性化し再度発症します。（図1）



図1：EHV-1 感染図

疫学

日本国内で初めてEHV-1感染症が認められたのは1967年です。米国からの輸入妊娠馬の流産を発端に、北海道と千葉県で計96頭の流産が認められました。それ以降、日本国内に定着し、現在も生産地の流産や発熱の原因となっています。EHMの発生は日本では稀で競走馬で1989年に1度、その他には生産牧場で数回の発生が認められているのみで、近年は発生していません。しかし、日本の馬の間でEHV-1感染症は広く存在していますので、EHM 発生リスクは存在しております。

欧米では発生が増加しており、米国では競馬開催が中止に、欧州では馬術大会の開催が中止になるなど大きな問題となっています。

症状

EHV-1感染症は、臨床症状として、呼吸器症状、流産、

神経症状を引き起こします。項目ごとに解説していきます。

①呼吸器症状

初感染のウマでは、感染後約2日で体温が上昇し、39～40℃を超える発熱が5日程度続きます。鼻汁は、初期は透明な水様性ですが、徐々に色の付いた膿性の鼻汁へと変化します。また、下顎リンパ節の腫脹が発熱2～3日後に認められます。

②流産

実験感染では多くの場合、鼻腔内接種から流産発症までに2週間以上の期間を要します。鼻腔の粘膜からウイルスが感染し、子宮到達後、胎子に移行すると考えられています。詳細な機序は明らかになっていません。特に前駆症状なく発症することが特徴です。好発時期は胎齢9ヵ月以降の妊娠後期となります。



写真1：起立不能



写真2：尿失禁

③神経症状

中枢神経において、ウイルスが血管の内皮細胞に感染し炎症を引き起こします。その際に、感染部位に血栓が生じると、血管をつまらせ、神経組織が壊死することで、異常歩様を引き起こし、麻痺や起立不能(写真1)といった症状を引き起こします。また、神経麻痺により尿失禁(写真2)や尻尾の虚脱なども引き起こします。

治療方法

EHMの根本的な治療法はありません。発熱、炎症、疼痛を抑えるために、副腎皮質ステロイド、フェニルブタゾン、フルニキシンメグルミンなどの非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)の対症療法が行われますが有効性は明らかではありません。血栓形成を抑制するためにヘパリンなどの抗血栓薬が使用されます。ヘパリンはEHM流行中の発熱馬に使用したところ発症率が低下したという報告もあります。また、アシクロビルやバラシクロビルなどの抗ヘルペスウイルス剤が使用されていますが効果は不明です。

予後

EHMの神経症状を発症した馬の予後は不良であることが多いですが、軽い歩様異常など、症状が軽度な場合は、後遺症が残らず、競馬に復帰した例もあります。

予防

馬鼻肺炎の予防のために生ワクチンが市販されています。馬鼻肺炎の好発時期は、呼吸器疾患では12月～翌年3月、流産では胎齢9ヵ月以降ですので、それらの時期の2週間前までに接種が完了するようにします。ワクチンを接種することで、初感染のリスクを低下させるだけではなく、再活性化したウイルスが呼吸器粘膜で再び増殖することに対しても抑制的に働くことが期待されます。これまでの調査では、ワクチンの集団接種を行うことで、呼吸器型の流行を抑制できることがわかっています。EHMは呼吸器型から引き続いて発症するため、ワクチンで呼吸器型の発生が抑えられれば、EHMの発生リスクも低減することが期待されます。しかし、ワクチンは完全に発症を防御することはできません。したがって、様々な防疫対応が必要となります。

まず、新規導入馬は輸送や使用環境の変化などによりス

また、妊娠馬が流産した場合は、すぐに当該馬房、作業者の衣類、羊水で汚染された場所すべてを消毒し、発症馬を隔離しましょう。流産した胎子はビニール袋などにいれ、ウイルスが拡散しないよう注意し所轄の家畜保健衛生所に搬入してください。

次に、「感染区域」の馬の世話をする人は「非感染区域」の馬を扱わないようにしましょう。こちらの運用ができない場合は、「非感染区域」の馬を最初に扱い、「感染区域」の

これらの処置は、最後に発熱などの症状を認めた馬の発生から14日間継続しましょう。「感染区域」の馬から鼻咽頭スワブを採取し検査し、EHV-1の存在が否定できた場合は期間を短縮してもよいでしょう。



幸いなことに、日本では近年 EHM は発生していません。しかし、馬の国際間移動は盛んになっていますので、EHM を起こしやすい遺伝子変異株が日本に侵入する恐れはあります。また、また EHM 発生のリスクを低下させるためには、EHV-1 感染による馬鼻肺炎（呼吸器型）の流行を抑制することが大事となります。皆様が所有する馬を伝染病から守るために、適切な防疫対応およびワクチン接種へのご協力をよろしくお願いいたします。

炎症マーカーで馬体内の炎症を捉える！ —ウマ血清アミロイドA（SAA）簡易測定キットの臨床応用—

鹿児島大学共同獣医学部 獣医学科 教授

帆保 誠二

はじめに

運動をはじめとした様々なストレスに暴露されている競走馬の体内には、程度の差はありますが、常に炎症反応が引き起こされています。

下肢部フレグモーネのような腫脹と疼痛を伴う感染症では、非常に強い炎症反応が引き起こされるため、発熱したり、跛行を生じたりすることから、容易に炎症の存在や程度を推測できます。一方、外観での把握が難しい肺炎のような炎症性疾患や体調不良の場合、炎症の存在や程度を把握することは容易ではありません。

そこで近年は、このような馬体内での炎症の存在や程度を客観的に把握するために、血液中の炎症マーカーが測定されています。

馬医療で測定される炎症マーカー

ウマの炎症マーカーとして、過去にはフィブリノーゲン(Fbg)が測定されていました。しかし、Fbgは炎症が発生してから上昇するまでに時間を要し、さらに炎症が終息した後も基準値に戻るまでに時間がかかることから、殆ど測定されなくなりました。すなわち、Fbgはウマの炎症の存在をダイレクトに示さないため、感染症の病態把握に有益な情報をもたらすににくいことから、殆ど測定されなくなりました。

このような中、人医療において、炎症マーカーである血清アミロイドA(SAA)の有用性が報告されました。そこで著者らが、その有用性を検討したところ、SAAが馬医療においても極めて有用な炎症マーカーであることが証明され、現在では多くの獣医師が測定しています。

血清アミロイドA(SAA)

SAAは、体内に発生した感染をはじめとした様々な刺激が発端となって、体内にサイトカインが増加した結果、肝

臓で合成が開始される急性相タンパク質のひとつです。人医療における代表的な炎症マーカーであるC反応性蛋白質(C-reactive protein: CRP)と同等以上の感度や即時性を有する炎症マーカーであることが多数報告されています。

馬医療におけるSAAの測定は、人のSAA測定試薬を用いた測定法(ラテックス凝集免疫比濁法)の有用性を著者らが報告して以来、瞬く間に広く臨床応用されるようになりました。しかし、ラテックス凝集免疫比濁法による測定には、専用の測定機器もしくは血液自動分析装置が必要です。そのため、その測定には多くの費用や時間を要することも明らかになりました。

そこで、著者が作製したウマSAAに対するモノクローナル抗体を用いたイムノクロマト法によるウマSAA簡易測定キットが2009年に市販され、多くの先生方が使用されてきました。しかし、同キット販売会社の合併に伴い販売が終了したため、それに代わる測定キットの開発が熱望されてきました。

フィールドでも測定可能なイムノクロマト法によるウマSAA簡易測定キットの開発販売

多くの先生方にイムノクロマト法によるウマSAA簡易測定キットの販売を熱望されましたので、今回、株式会社ニッポンジーンの協力により販売に漕ぎ着けることができました。

販売に至ったウマSAA検出キットである「 α lphaVET™ ウマSAA Rapid -RUO-」は、著者がJRA勤務時に作出したウマSAAに対するモノクローナル抗体2種類を使用しています。当該モノクローナル抗体は、極めて高感度かつ特異的にウマSAAを検出できますので、感染症の診断のみならず、トレーニングに伴う異常を早期に高感度で検出した、コンディション判定にも応用できます。

「 α lphaVET™ ウマSAA Rapid -RUO-」によるSAAの測定には、遠心分離操作を必要とする血清や血漿のみならず、全血も使用可能ですので、検査室に限らずフィールドで

も測定可能です。

「 α lphaVET™ ウマ SAA Rapid -RUO-」による SAA 測定の実際

以下の手順で測定します。

1. 生理食塩水500 μ Lを分注したチューブに、検体（全血、血漿、血清）1 μ Lを添加し、軽く混和します（図1a）。
2. 試験紙をチューブにセットします（図1b）。
3. 10分間経過後に、試験紙をチューブから取り出し、色見本と比色します（図2、3）。
4. 相対的な SAA 濃度が把握できます。

なお、全血の場合は、ヘマトクリット値の影響を受けますので、血漿や血清の約60%の SAA 濃度となります。



図2 「 α lphaVET™ ウマ SAA Rapid -RUO-」による標準 SAA の測定結果

左側の試験紙から、標準ウマ SAA 0、6.25、12.5、25、50、100 μ g/mL のバンドを示しています。上段が Control line（対照）を、下段が Test line（検査結果）を示します。検体の Test line の濃度を、色見本（図3）の Test line の濃度と比較し、相対的なウマ SAA 濃度を決定します。検体に全血を用いても、血球とテストラインを分離して観察できますが、ウマ SAA 値は検体が血清や血漿の場合の約60%（=100－ヘマトクリット値）となります。

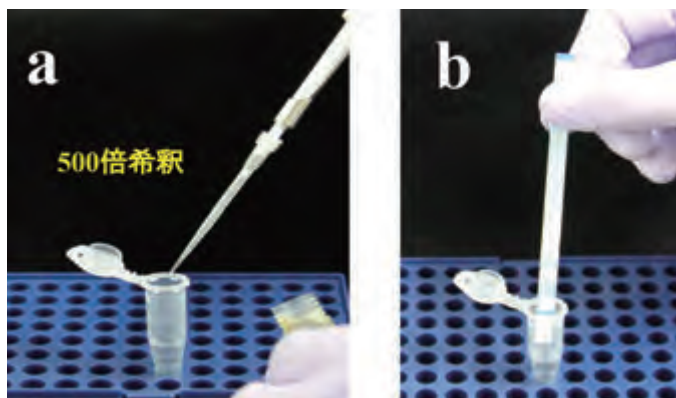


図1 「 α lphaVET™ ウマ SAA Rapid -RUO-」による SAA の測定

- a：生理食塩水 500 μ L にサンプル 1 μ L を添加し、軽く混和します。
- b：試験紙をセットし、10 分間経過後に色見本と比色して、SAA 値を把握します。

当該キットはウマ SAA を6.25～100 μ g/mL の範囲で測定できるように調整してありますので、100 μ g/mL を超える濃度のウマ SAA を測定する際には、検体を生理食塩水で10倍希釈後、生理食塩水500 μ Lを分注したチューブに1 μ L 滴下、混和すると、62.5～1,000 μ g/mL の範囲のウマ SAA 濃度を測定可能です。

ウマ SAA の基準値と各種病態での測定値

基準値の設定：順調にトレーニングを実施しており、臨床的な異常所見を認めない現役競走馬300頭の SAA 濃度を調査した結果、殆どのウマで0.0 μ g/mLであり、最大値でも1.0 μ g/mL 以下でした。このことから、ウマの SAA 基準値は0～1.0 μ g/mL に設定しました。

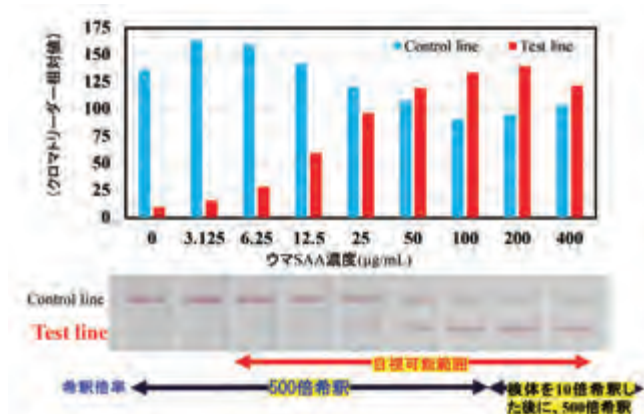


図3 「 α lphaVET™ ウマ SAA Rapid -RUO-」を用いたウマ SAA 濃度のクロマトリーダー測定による相対値と色見本

図上段は標準ウマ SAA 濃度 0、3.125、6.25、12.5、25、50、100、200、400 μ g/mL のクロマトリーダー測定による相対値を、図下段は左側試験紙から順に標準ウマ SAA 0、3.125、6.25、12.5、25、50、100、200、400 μ g/mL のバンドを示しています。

当該キットは、ウマ SAA を 6.25 ～ 100 μ g/mL の範囲で、濃度依存的に測定できるように調整してありますので、100 μ g/mL を超える濃度のウマ SAA を測定する際には、検体を生理食塩水で 10 倍希釈後、生理食塩水 500 μ L を分注したチューブに 1 μ L 滴下、混和すると、62.5 ～ 1,000 μ g/mL の範囲のウマ SAA 濃度を測定可能です。

コンディション判定：競馬出走に向けてトレーニングを実施している競走馬に対して、身体検査、SAA 測定及び調教師への聞き取り調査を実施し、競走馬のコンディション判定における SAA 測定の有用性を検討しました。その結果、身体検査では所見は認められないものの、調教師や騎乗者が違和感を感じた競走馬は、いずれもウマ SAA 濃度が10 μ g/mL 程度まで上昇していました。おそらく、調教師や騎乗者は競走馬の走行フォームや息づかいに違和感を感じており、そのことが SAA 濃度に反映したものと推察されました。このことから、SAA 濃度測定はウマのコンディション判定にも有益であると考えられました。このような背景もあり、「 α lphaVET™ ウマ SAA Rapid -RUO-」では比較的低濃度（6.25 μ g/mL）まで測定できるように調整しました。

また、先に開催された東京オリンピックでの SAA 測定や、海外の調教師が SAA を定期的に測定していることを考えますと、ウマのコンディション判定にも SAA は有用なマーカーであると考えられます。

身体検査で病態が把握しやすい疾病：フレグモーネ、下痢、外傷のように身体検査で病態が把握しやすい疾病では、敢えて SAA を測定する必要は無いように思います。しかし、抗菌薬の効果判定、抗菌薬投与終了の判断、あるいはオーナーに炎症の程度を客観的なデータとして示す際には有益だと考えています。

身体検査で病態が把握しにくい疾病：肺炎のように、身体検査のみでは病態の把握が難しい疾患の場合は、SAA 測定が有効です。肺炎は、初期病態の把握を誤ると胸膜炎を併発し、死に至る極めて重要な疾患です。発熱が、感冒によるものか肺炎によるものかを、臨床症状や身体検査で正確に判断することはかなり難しいと思います。重症の肺炎であれば、おそらく殆どの獣医師が診断することができますが、初期病態の肺炎の病態把握は非常に難しいと言えます。このような症例に対して SAA を測定すると、感冒なのか、肺炎なのかを診断する手助けになります。

抗菌薬の効果判定：感染症に対して、投与している抗菌薬が効果を示しているかを判断するためには、体温と臨床症状が最も重要です。そのためには、解熱消炎鎮痛剤（NSAIDs）の投与は極力控えるべきですが、多くの先生が NSAIDs を使用されていると思います。このように NSAIDs

を投与しているウマでの抗菌薬の効果判定には、SAA 濃度の測定が有用です。著者は、感染症に対しては基本的に NSAIDs を投与しないので、抗菌薬の効果判定は比較的容易ですが、NSAIDs を投与される先生方には SAA 測定をおすすめします。

抗菌薬投与を中止する判断：投与している抗菌薬を、いつ中止するか判断は非常に難しいと思います。完治するまで抗菌薬を投与するのが最も確実な抗菌薬療法であると思いますが、それには時間も費用もかかりますし、副作用や耐性菌の出現も考慮する必要があります。あくまでも身体検査に基づく臨床所見が抗菌薬を止める判断の主体ですが、それをサポートするのが SAA 濃度の測定です。感染症の病態が良化してくると、SAA は直線的に減少していくことが殆どですので、SAA 濃度を参考にされるといいかと思います。

最後に

以上、馬医療において SAA を測定することの意義や応用性を説明しました。中には、「病気は診ればわかる、そんなの不要だ」とお考えの先生もいらっしゃるかと思います。おそらく、ベテランの先生には SAA 測定は必要ないと思います。しかし、ウマの感染症の診療や研究に長年にわたって携わり、感染症のことの多くは分かっているつもり著者でも、「これ感染症？」と思う症例がいます。このような症例には、「とりあえずマイシリン」もありかもしれませんが、抗菌薬の慎重かつ適正使用が求められている現在では、そうはいかないかと思います。

著者が SAA を JRA のトレーニングセンターに導入した際にも、不要論は多数ありました。しかし、今日ではそのようなことを言う獣医師はいないように思います。どちらかと言えば、SAA に頼り過ぎだと感じている管理職もいるようですので難しい面もあるかもしれません。有益な物は使い、無益なものは排除でいいと思います。

最終的に診断を下すのは獣医師ですので、SAA 測定がその一助になれば幸いです。

引用文献

フィールドでも測定可能な炎症マーカー「ウマ血清アミロイド A (SAA)」測定キットの開発、帆保誠二，全公獣協ニュース，541，28～32，2023年7月発刊。

★ BTC 調教場利用 重賞競走等 優勝馬一覧 (2023 年 9 月～ 11 月分) 関係者の皆様、おめでとうございます。

(中央競馬)

・エルトンパローズ 牝 3 歳 毎日王冠 GⅡ (2023/10/08・東京)
・トウシンマカオ 牝 4 歳 京阪杯 GⅢ (2023/11/26・京都)

(地方競馬)

・キングズソード 牝 4 歳 JBC クラシック Jpn1 (2023/11/03・大井)

・ライオットガール 牝 3 歳 クイーン賞 Jpn3 (2023/11/29・船橋)
(海外競走)

・リメイク 牝 4 歳 コリアスプリント G3 (2023/09/10・KOR)
・オオバンブルマイ 牝 3 歳 The Golden Eagle (2023/11/4・AUS)

あ・と・が・き

- ★ BTC 研修修了生から初めての JRA 調教師となった美浦・青木孝文調教師が管理するマイネルグロン号が東京ハイジャンプ (J・GⅡ) を優勝し、重賞を初制覇しました。青木調教師は BTC 研修第 17 期生 (2001 年修了) で、研修後はビッグレッドファームに就労。厩務員→調教助手を経て、2017 年に JRA 美浦 TC で開業、BTC 研修出身の調教師として今回初の重賞制覇となりました。センターから祝花をお送りしたところ、「長らくお待たせしました！」とお返事をいただきました。今後さらなるご活躍を祈念しております。
- ★ 2023 年 8 月、JRA 調教師試験に合格した栗東・河嶋宏樹調教師 (BTC21 期修了生) が BTC を訪問、現研修生を激励して頂きました。BTC 研修出身の JRA 調教師は、前述の青木調教師、栗東・杉山佳明調教師 (20 期 2021 年開業)、栗東・小栗実調教師 (23 期 2023 年開業) に続く 4 人目。始終にこやかな笑顔と時折笑いを交えたトークで語られる様々な苦労話や馬への真摯な姿勢に研修生たちは大いに刺激され、自分達もがんばろうと決意を新たにしていました (関連記事 P9)。
- ★ 寒さも本番となりますが、今冬も昨年に続き積雪の少ない冬であってほしいと願うばかりです。場内ではトレーニングを重ねてきた若馬達が、調教進度を上げながら体力・スピードに磨きをかけています。鍛錬した力を十分発揮し、今年も競馬産業を大いに盛り上げていただきたいと思います。本年も強い馬づくりに貢献する調教場として、スタッフ一同尽力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。(K.H.)

BTC ニュース 2024 年 (1) 第 134 号

発行日：令和 6 年 1 月 1 日

発行：公益財団法人 軽種馬育成調教センター TEL 0146 (28) 1001 (代)

FAX 0146 (28) 1003 e-mail : kyoiku_fukyu@b-t-c.or.jp

〒 057-0171 北海道浦河郡浦河町字西舎 528

編集責任者：松尾 雅洋

編集：小林 光紀

制作・印刷：西谷印刷株式会社

〒 135-0022 東京都江東区三好 2-1-4

※ BTC ニュースに関するお問い合わせ、配送先変更・配送中止のご連絡は、下記にて受け付けております。



HP